

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	米崎 啓和
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 高塚 成信 副主査：（兵庫教育大学教授） 吉田 達弘 委 員：（兵庫教育大学教授） 谷 明信 委 員：（鳴門教育大学准教授） 山森 直人 委 員：（岡山大学教授） 寺澤 孝文
3. 論文題目	A Study on How to Enhance Spoken Word Recognition by Japanese EFL Learners with Lower Levels of Proficiency （初級レベルの日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知力を高める指導法に関する研究）
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻言語系教育連合講座 米崎 啓和 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年 2月 9日（木） 16時00分～17時00分          場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス3階 講義室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>（1）論文の構成</p> <p>第1章 序章          第2章 リスニングのプロセスと音声単語認知          第3章 音声単語認知と英語の音声的特徴          第4章 実験1：日本人初級英語学習者の内容語と機能語における音声単語認知のギャップ          第5章 実験2：和訳先渡しのトップダウン処理方略使用への効果          第6章 実験3：文法・語句知識付与の音声単語認知への効果          第7章 実験4：スピーチ速度圧縮の音声単語認知への効果          第8章 実験5：英語音声特徴の明示的指導の音声単語認知への効果          第9章 終章</p> <p>（2）論文の概要</p> <p>第1章では、本研究の目的が述べられている。本研究の主目的は、初級レベルの日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知力を高める効果的な指導法を提案することである。本研究では初めに、リスニングの過程とその過程における単語認知に関する理論的背景を分析し、続いて、どのような指導法がこれらの学習者のリスニングにおける単語認知を改善するために有効であるかを実証的に検証するためにいくつかの実験が行われている。</p> <p>第2章では、本研究の理論的背景が述べられている。理論的には、人が音声を聴きとる過程は、大きく3つの段階、知覚・分析・活用からなっており、これら3つの過程の全てにおいて、ボトムアップ処理とトップダウン処理の2つの処理が関わっていることが明らかになっている。従って、聴解がスムー</p>

ズに行われるためには、これら2つの処理が完全に機能していることが必要となる。

一方、リスニングにおける単語認知は音声を理解するにあたっての基本的な要素である。なぜなら、リスニングにおいては、読解とは異なり、単語はスペースではっきりと区切られているわけではないからである。故に、学習者は、切れ目のない音声の中で自ら単語の切れ目を見つけ、その中の単語を同定しなければならない。特に外国語学習者の場合、この単語認知の作業は自動化されているとは限らず、その場合音声の理解に支障をきたす。

日本人英語学習者、特に初級レベルの学習者の場合には、文字においてならば認知・理解に問題のない単語であっても、話し言葉の中で認知するのが難しい場合が多い。加えて、個別に発音された時に同定できる単語であっても、連続した話し言葉の中では、そこからその同じ単語を切り出して認知することができない場合もある。

第3章では、これらの問題の一因は、英語と日本語の音韻特性の違いにあることが述べられている。特に英語の強勢拍リズムと閉音節構造は、音声における多くの音変化を生み出し、話し言葉と書き言葉が長さにおいて一致しない要因ともなっている。これは日本人英語学習者にとっては厄介な問題である。なぜなら、日本語はモーラ拍言語であり、書かれたとおりに発音されるからである。

先行研究によると、英語の話し言葉における単語認知の基本単位は、1つの強音節といくつかの弱音節からなる「ストレスユニット」とされる。英語における話し言葉の単語認知においては、これら「ストレスユニット」を構成する数単語のかたまりが重要な役割を果たすのであって、個々の単語が重要なのではない。従って、聞き取りが困難な弱音節を正確に認知するには、まずそれらの数単語のかたまりを捉えたうえで、そのかたまりを個々の単語に分解していかなければならない。

しかしながら、日本人英語学習者は、英語の自然なリズムや発話速度に慣れていない。また、発話速度はリスニングにおいては最も重要な変数の1つとされる。これらの理論的背景を踏まえ、日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知を改善する上で有効な指導法を探るため、5つの実験が行われた。

第4章では、実験1が報告されている。この実験では、機能語は、ほとんどの場合弱音節から構成されるため、内容語に比べて認知が難しいと予想される。これを実証的に検証した。その結果、機能語の認知は内容語の認知に比べて難しいことが示された。また、発話速度が重要な変数として関わっていることも明らかになった。

第5章では、実験2が報告されている。この実験では、日本語訳をディクテーション練習の前に与え、これから聞く音声を予測するように指示を与える処遇によって、単語認知が改善することが示された。単語認知の改善は、意味・文脈からの推測といったトップダウン処理の介入が強化されたためと思われる。また、この処遇は内容語のみならず機能語の認知改善にも有効であった。

第6章では、実験3が報告されている。この実験では、文法・熟語知識を与える処遇はリスニングにおける単語認知の向上に限られた効果しかないことが示された。初級レベルの日本人英語学習者の場合、ある程度遅い発話速度のリスニングにおいての内容語の認知には有効であるが、ある程度速い発話速度の場合や機能語の認知においてはこの処遇はあまり効果が見られなかった。

第7章では、実験4が報告されている。この実験では、実験参加者は半年間に渡って、授業内のテキスト教材のリスニングを4つの異なる速度で聞き続けた。その結果、通常速度の1.5倍で聞いたグループは元の速度における単語認知が向上することが示された。しかしながら、機能語の認知における改善はあまり見られなかった。

第8章では、実験5が報告されている。この実験では、英語の音韻特性に焦点を置いた。処遇においては、英語の強勢拍リズム、閉音節構造、その他の音韻特性について明示的な説明を与えた後、会話文のリスニングと発話練習を行った。発話練習においては、実験参加者は英語の強勢拍リズムやその他の音韻特性を忠実に守ることを求められた。この処遇は内容語と機能語の両方において単語認知の改善に効果がみられた。

第9章では、これらの5つの実験による実証データに基づき、初級レベルの日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知改善の指導法に関して、以下の4点を結論として提言した。1点目として、英語の強勢拍リズムをはじめとする音韻特性に関して明示的に説明した上でリスニング練習及び発話練習を課し、英語本来の音韻特性に慣れさせることは指導法として有効である。2点目として、発話速度を標準速の1.5倍にして聞かせ続けることも有効である。3点目として、学習者にリスニングの際、意味に注目させて聞こえてくる音声から英語を予測するように促すことは重要である。4点目として、文法・熟語知識を与える際には、発話速度や英語のリズムなどの音韻特性に関連したボトムアップ処理の強化を含むことが必要となる。

これらの結果に基づき、日本の教育現場においては、英語本来の強勢拍リズムといった音韻特性が完全に反映された真正性のあるリスニング教材は避けられるべきではない、ということが本研究の提言とされた。

## 2. 審査経過

### (1) 研究目的の妥当性と論文構成の整合性

本研究は、初級レベルの日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知力を高める効果的な指導法を提案することを目的としたものであり、多くの日本人学習者が、長期にわたる英語学習にも関わらず低いレベルに留まっていることを考えると、学校における英語教育の改善に資する可能性をもった妥当かつ意義ある目的である。

その目的を達成するために、本研究においては、リスニングの過程とその過程における単語認知に関する理論的背景並びに先行研究を分析し、音声単語認知のトップダウン処理とボトムアップ処理に関わるとされる要因を特定した上で、どのような指導がそれら要因との関係において学習者のリスニングにおける単語認知を改善するために有効であるかを実証的に検証するため5つの実験が行われており、それぞれの実験が論文の各章を構成し、その後、実験から得られた英語教育への示唆・提言でまとめられており、研究目的と論文構成に整合性がある。

### (2) 論文の独創性

本論文の独創性は、日本人英語学習者にとってなぜ連続した英語音声からの単語認知が困難であるのかについて理論的背景を明らかにしたうえで、トップダウン処理とボトムアップ処理の両面からその解決策を実証的に提示している点にある。特に英語においては、音声と文字のギャップは極めて大きく、文字による学習に慣れた日本人英語学習者は、英語音声に苦手意識が強い。連続した音声からの単語認知が十分にできないことは英語におけるリスニング力が伸びない一因となっており、英語の音声的特徴に着目した本研究は、今後の英語リスニング指導をどのように進めていくかを考える上で大きな意味を持っている。

### (3) 論文の学校教育実践への貢献と発展性

本論文は、聴解と読解のプロセスにおける最初の段階である知覚（単語認知）に焦点を置き、音声入力と文字入力による知覚の違いを埋めるための効果的な教育手法を提言している。この差を埋めることができれば、かねてからの日本人英語学習者の長所である文法力・構文把握力を、読解においてと同様に、聴解においてもより効果的に活用することが可能になる。また、本研究で有効性が実証され提言された指導法（1. 英語の強勢拍リズムを始めとする音韻特性に関して明示的に説明した上でリスニング練習及び発話練習を課すこと、2. 発話速度を標準速の1.5倍にして聞かせ続けること、3. 学習者にリスニングの際、意味に注目させて聞こえてくる音声から英語を予測するように促すこと、4. 文法・熟語知識を与える際には、発話速度や英語のリズムなどの音韻特性に関連したボトムアップ処理の強化を含むこと、5. 英語本来の強勢拍リズムなど音韻特性が十分に反映された真正性のあるリスニング教材を使用すること）は、実際の教育現場で十分に応用が可能なものであり、コミュニケーション能力育成に重点を置く今後の学校英語教育実践において広く活用できるものである。従って、その貢献と発展性は大きい。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、米崎 啓和 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。